ビキニデーin高知2023

未来の子どもたちに事実を伝え世界の人々と連帯したい

5月5～7日に幡多のフィールドワークと高知市での全体集会が開催され、延べ330名が参加しました。
幡多フィールドワークの報告は初日の抜粋で、報告全文は「機関誌こうたいきょう」に掲載します。

幡多フィールドワーク
命がけで漁をしたのに涙が出た

5月5日(金)、総勢80名ほどの幡多フィールドワークが始まった。早速、宿舎のホテルでビキニ被災者から聞き取り調査が行われた。

まず国際会議で使用したビデオを上映。次いで体調不良で参加できなかった横山さんの証言をビデオ上映した。

横山さんは14歳の時、長崎で被爆、戦後ビキニでも被災した二重被爆者。横山さんは第11富佐丸で獲ったマグロを東京築地で水揚げする前に、検査され外洋投棄させられている。釣ったマグロを食べ、スコールで体を洗っていた。50歳を過ぎた頃からマグロ船に乗っていた友人が次々と死亡する知らせが届くようになった。ほとんどが白血病やガン。2019年には胃ガンの手術を受け、その後あまり体調が良くない。それでも、国などを提訴した訴訟の原告に加わっている。

横山さんのビデオが終了し、谷脇さんがマイクを握り証言した。

証言する谷脇さん

「私は19歳でマグロ船第13光栄丸に乗り、ビキニ近くで操業していた。釣った魚を食べ、シャワー代わりにスコールで頭や体を洗った。日本では釣ったマグロを全部捨てらされた。命がけで漁をしたのに涙が出た。情けなかったがどうしようもなかった。40歳過ぎから目まいがするようになり、船を降りるたびに病院へ行った。医者からはC型肝炎と言われ、肝臓ガンと胃ガンの手術を受けた。自分が被ばくしているかどうか分からないが、魚が放射能に汚染されていたのだから体に影響がないとは思えない。公海での水爆実験で被害を受けたのだから、国には責任をとってもらいたい」と悔しさをにじませた。

聞き取り調査がすむとサンセットクルーズ。しかし、乗船予定者が乗らぬうちに、漁船第1便が出航するなどハプニングがあったが、高知のメンバーが県外者を優先しましょうと自ら辞退、そのおかげで他の方々は第2便に乗船できた。辞退者5名は港内で釣り。初めての方もおり小さなフグやネンブツダイだが、釣るたびに歓声が上がった。第2便の人たちは先導され、ホテルから崖伝いに港まで降りた。急峻な細い道のハラハラ、ドキドキ感と港や太平洋の眺望がすばらしかった。サンセットクルーズは厚い雲で沈む夕陽を見ることはできなかったが、海上から足摺岬を眺める稀有な経験をすることができた。それ以上に温かな思いやりの夕陽を感じることができた。

高知市全体集会
事実を掘り下げ読み解く大切さ

「ビキニデーin高知2023」全体集会が5月7日グリーンホールで開かれ、約250名が参加しました。

オープニングは劇団「the創」の朗読。

第一部では、明星大学教授竹峰誠一郎さんとジャーナリスト笹島康仁さんが対談形式で、「同じ核被災の状況が世界各地にあり被害は続いている。当事者の話を聞くことはなく、国として謝罪せず義務を果たさず、問題の構造は残されたままである。個々の被害ではなく世界の核被災としてとらえる必要があり、人権・環境問題としてグローバルにとらえることで共通の課題として幅広く連帯することができる」と報告。

ビキニ被災マーシャル諸島核問題委員会のエヴェレン・レレボウ・ジェアリックさんは、マーシャルでの被爆の実態と自身の活動について報告。「教育は重要、未来の子どもたちに事実を伝え、世界の人々と連帯したい」と述べました。

アーサー・ビナードさん

第2部は、詩人のアーサー・ビナードさんが「果てない『原子力時代』のナレノハテのぼくら」と題して紙芝居を使って講演。事実を掘り下げ読み解くことの大切さを痛感させられました。

講演後はアーサーさんと高知の青年・会場の大学生たちとの討論。積極的に発信し連帯を広げる若者の力強い行動力に大いに励まされ勇気をもらいました。

終わりに、高知県の被ばくに関する報告が行われ、核兵器廃絶・世界のヒバクシャとの連帯を求める声をあげ、多様な行動を続けていくことを確認し、集会宣言を採択し閉会しました。

（林　博子）